

ドキュメント「水俣病事件」

1873~1995

沈黙と爆発

SILENCE & EXPLOSION

後藤孝典

Takanori Goto



SHUEISHA
NONFICTION

ドキュメント「水俣病事件」

1873～1995

沈黙と爆発

SILENCE & EXPLOSION

後藤孝典

Takanori Goto



SHUEISHA
NONFICTION

集英社

ドキュメント「水俣病事件」
ちんもく ぼくはつ

沈黙と爆発

1995年5月30日 第1刷発行

著者◆こうたかのり後藤孝典

発行者◆若菜正

発行所◆株式会社集英社

〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

☎03-3230-6090 [編集部] 03-3230-6393 [販売部] 03-3230-6080 [制作部]

印刷所◆中央精版印刷株式会社／株式会社美松堂

製本所◆中央精版印刷株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。

定価はカバーおよび帯に表示してあります。

© 1995 TAKANORI GOTO, Printed in Japan

ISBN4-08-775195-3 C0095

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

ドキュメント「水俣病事件」

沈黙と爆発◆目次

第一章 水俣の近代化

一 一二つの顔

12

南端の村 工場誘致 反対と賛成 希望ののろし

二 日本窒素肥料株式会社

20

扇に日の丸 創業者・野口遵 私財を寄附 成功の原因 水俣病発生の遠因 後進と先進 朝鮮
興南工場 敗戦と引揚げ

三 橋本彦七

39

工場長 原因工程の発明者 初代市長 工場を守る 市長の死 工場あつての水俣市

四 奇病の発生

50

百間排水口 水俣港 みなと祭りの日に

五 患者・田中実子

57

坪谷 舟大工 しず子の症状 実子の症状 水俣病のメカニズム 都市化

第二章 敗北

65

一 水俣の夢・水俣の悪夢

66

被害 原因 沈黙

二 漁民の敗北

74

二つの敗北 水俣の漁民 第一次水俣漁民紛争 県漁連第一回行動 県漁連第二回行動 県漁連の敗北 社会的事実であります 見舞金契約

三 原因を隠蔽せよ

88

一步に一〇年 原因は水俣工場 政府がやります

四 沈黙の一〇年

93

自然消滅 原因確定 石油化学工業への転換 第二水俣病 政府見解の公表 三つの障壁 発生は終ったか 法的な壁 終りは始まり

第三章 俺の病気は何だ

105

一 川本輝夫

106

生まれ 日雇い人夫 異変 誘い 第二次水俣漁民紛争 チッソ採用せず 臨時工 ピケ要員 父の死 そんなにお金がほしいのか 最初の申請 最初の否定

二 たった一人から 124

夜ごと自転車に乗って 俺一人で沢山だ 厚生省に一任せよ 裁判が始まった 小さな集り 補償処理 厚生省職員の造反 法律ができた 二回目の否定 不満申立

三 一株運動 138

水俣へ 患者に提案 思いに表現を 株主総会乗り込み 「フタオヤデゴザイマスゾ」

四 県知事処分を取消せ 150

白装束の背 行政不服 反論書 三人だけの自主交渉 現地審尋 毛髪水銀 参考人陳述 チツソの番頭熊本県 仕事のあい間にやっている 逃げた厚生省 木造の環境庁 裁決

第四章 自分たちでやろう

169

一 水俣市民の敵になって 170

見えはじめた幽霊 モノサシがない 一〇万円でも払わない 二つの署名運動 ビラ合戦 患者は市民の敵 世論を敵にしてもチツソを守れ 孤立 脱落 このままでは埒があかない 東京へ

二 東京乞食 190

通じる言葉がない 「ミンナミテイル」 クリスマス・イブ 路上で新年 丸の内の鉄格子 仲介 挫折

三 手負いの猪

208

「二人だけでよかじやなか」 人のためではなく「誠意がないよ」 行き場もなく カンパ部隊
合流へ 川本起訴 筆跡はみな同じ 委任状は偽造 金縛り 調停頓挫

四 判決を超えて

224

合休 判決 誓約書 決まったモノサシ 死亡者を先に 信用担保 判決を基準に ゼロ回答
砕けた灰皿 判決並み「会社はつぶれると思う」 公調委の面目 誰もいなくなった 小アジな
ら一二匹 協定書 テントをたたんで

第五章 その後のこと

255

申請者増大 行政判決 川本刑事裁判 チッソ赤字増大 県債 日本式解決 水俣の再生

あとがき

267

装幀 江島 任

カバー写真 オリオンプレス

ドキュメント「水俣病事件」

沈黙と爆発

読者の皆様へ

明治以降の日本は、最後尾を追ったヨーロッパであり、最先頭を走ったアジアであった。チッソという企業もそうであった。チッソの歴史は、明治以降の日本の歴史である。

戦後日本は、まず喰わねばならなかった。経済を復興させなければならなかった。チッソもそうであった。チッソの復興は、戦後日本の復興であった。

明治、大正、昭和と日本窒素肥料株式会社が勃興し、水俣病の遠因が生まれた。戦後の復興の先頭を走って水俣病がひそかに発生し、政府の経済白書が「もはや戦後ではない」といった一九五六年、水俣病が公に確認された。その後の一五年間、日本経済は年率平均九・二パーセントで上昇し、実質国民総生産は三・七倍にのぼった。この経済成長のスピードにあわせて水俣病が拡大した。

九州熊本県の水俣という片田舎に、アジアとヨーロッパが隣りあわせ、中世と近代とが同居していた。その上に圧縮された戦後日本の駆足が重なった。その軋轢の狭間で、被害者たちは沈黙を強いられ、そして爆発した。

本書は、その沈黙と爆発の物語である。水俣病事件を通しての、日本の近代化と戦後日本史へ

の招待である。

ある漁師の息子が、手さぐりに脱出の道をさぐりはじめる。

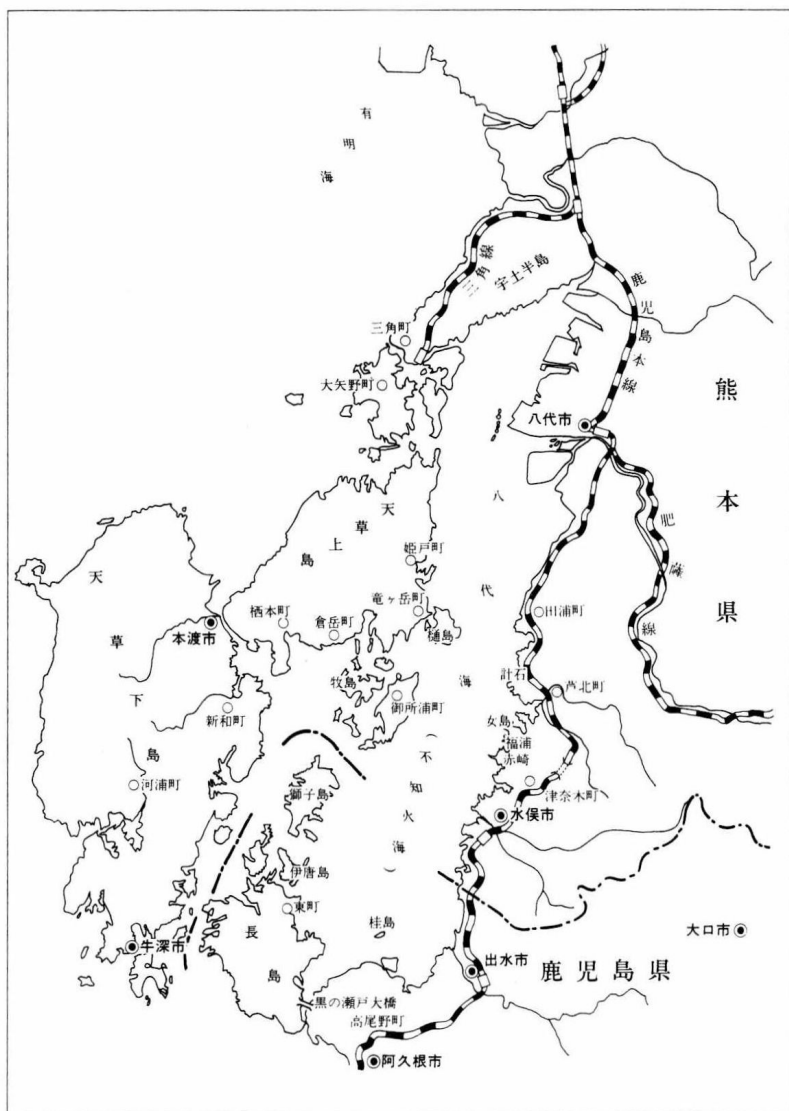
思いがけない展開がひらける。

新しい時代の勢いが加勢する。

そして、ドラマが始まる。

一九九五年一月一日

戦後五〇年目の東京の正月に



第一章

水俣の近代化

一 二つの顔

【南端の村】

国道三号線は、門司からＪＲ鹿児島本線ぞいに南下し、熊本市をぬけ、鹿児島市内まで走っている。

北から車で水俣に入るには、この道一本しかない。

私は、一九七〇（昭和四五）年の五月末頃に、初めて水俣を訪ねた。

熊本市内での、予想外の結末になってしまった「水俣病を告発する会」の人々との会議を抜け出し、車で水俣へ向かった。南へ向かって二時間も走り、丘を登りつめ、かつての水俣城の城跡の近くまでくると、丘が下り始め、水俣の市街を見わたすことができる。

水俣市の市域は、西側は不知火海（しらぬい）に向かって開けているが、北、東、南の三方から山に取囲まれている。孤立した地形である。

位置としても、熊本県の最南端にあり、東や南の山々は、鹿児島県の北の端に直結している。

不知火の海は、海という言葉がもつ荒々しさとはほど遠く、ゆったりと静かな、古代そのままの姿をとどめている。

対岸にかすんで見える天草諸島は、島々をいくつも連ねて不知火の海を抱えこみ、外洋を遮断している。

北側には宇土半島が突き出して、天草諸島に連続している。

不知火の海は、閉ざされた水域といってよい。

このような位置と地形は、水俣という土地の性格を深く運命づけてきた。

水俣市は、面積自体が狭いうえ、その七四パーセントが山林で、大規模な水田を拓きようもない。一戸あたりの平均耕作面積は三五アールだ。

私は子供の頃、美濃南部の、見渡す限り水田が続く地域で育ったが、あの風景に比べれば、水俣の農業はいかにも小規模だ。

林業に力が入れられてはいるが、林業の町といえるほどではない。

水俣における地場産業の中心は、漁業であったということになる。しかし、その漁業も、魚の種類は豊富であっても、主力はいわしで、漁法も船びき網だから、とても大規模なものにはなりようもない。

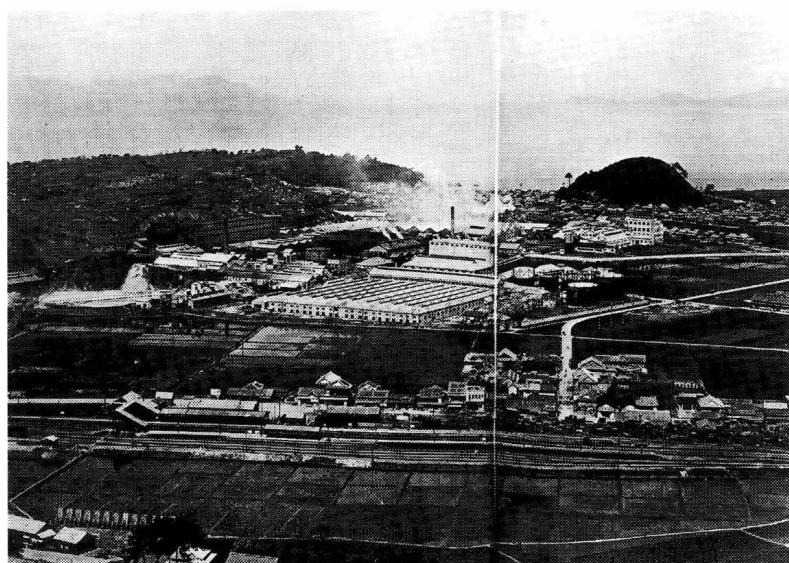
近代が侵入する以前の水俣の人々は、日本中どこにも見られたように、半農半漁の質素な衣に包まれて穏やかな生活を送っていた。

それだけに、水俣の人々は、近代の粹を集めた化学工場の招来を心から喜び迎えた。

【工場誘致】

水俣の人々が、工場を誘致しようとした理由の一つに、塩の専売制の導入がある。

この地域の製塩の歴史はかなり古い。



1935年頃の水俣工場（『日本窒素肥料事業大観』より）

一六六七（寛文七）年に、水俣の代官、深水家の二代目によって、塩田一七町九反が造成されて以降、次第に拡大され、日本窒素肥料株式会社が招来される直前には、三四町余にのぼり、製造量の七〇パーセントが佐賀や島原に送り出されている。しかし一九〇五（明治三八）年に、日露戦争の戦費を賄うために始められた塩の専売制とともに、塩田はすべて消滅してしまふ。広大な塩田の跡地は埋立てられ、次第に日本窒素肥料株式会社の工場に変貌していった。水俣は、チッソ発祥の地である。

が、チッソにとっては、水俣に工場を設けなければならない特別の理由があったわけではなかった。

創業者である野口遵は、帝大の電気出身であり、電気で事業家になろうと志していたから、水力電力の得やすい九州南部に最初の発電所を造ったところまでは、必然性のある筋道であるが、カーバイト工場を